

国語科の学習に生きる自己評価について

「読み」の学習を中心に -

国語科研究会議

研修員 坂本 正治（川崎市立中原小学校） 井上 恵子（川崎市立稲田小学校）
野口 英司（川崎市立宮内中学校） 久保田聡子（川崎市立川崎中学校）

研修指導主事 白井 理

主題設定の理由

学習指導要領では、「自ら学び、自ら考える力」など、「生きる力」の育成が求められている。知識を得たり読解したりする学習だけではなく、学ぶ意欲や思考する力を大事にした国語学習を私たち教師は展開していくことが求められている。そのために、児童生徒の活動欲求を把握し、その欲求と単元目標とをつないでいくような支援を心がける必要があると考えた。

昨年度は、そのような考えから、文学作品の主題を一様に理解させることをねらいとした授業ではなく、子ども自身が自ら読みにかかわっていくような言語活動型の授業づくりをめざした。そして、学習活動に自己評価を取り入れることで、今までは見えにくかった子どもの関心・意欲や思考を的確にとらえ、個に応じた支援を通して言葉の力が身に付くような「読み」の授業を進めるようにした。

その結果、「自己評価力は、短い期間で育つものではなく、国語科においても全ての領域を通して長い期間をかけて高めていくものである。」ということが課題の一つとして挙げられた。また、「自己評価の発達段階に応じた系統的な高まりを示していきたい。」という願いをもった。

そこで、今年度は検証する授業を文学教材には限定せずに、他のジャンルの「読み」の学習における自己評価の有効性を探っていきたいと考えた。また、発達段階の違いにおける自己評価の有効性についても探っていくようにした。

研究の内容

1. 研究の仮説

昨年度の研究仮説の検証を、より進めることをねらったので、仮説は同じものを設定した。

学習者主体の言語活動型の「読み」の授業において、子どもが目的、必要感をもった能動的な自己評価活動を行うことで、

自らの「読み」に対する自己評価力を高め、より主体的な読み手として、言葉の力が身に付くような学習を展開するであろう。

子どもへの支援をより適切なものにするにより、教師の授業改善に有効に働くであろう。

2. 研究の視点

(1) 意図的・計画的に自己評価を取り入れ、その有効性を探る

子どもの主体的な「読み」の力を高めるために、学習活動に自己評価を意図的・計画的に取り入れる。そして、発達段階に応じて教師の評価も含めた他者評価の手助けを得ながらも、自らの「読み」に対する自己評価力を高め、より言葉の力が身に付くような学習につながるかどうかを探るようにした。

また、子どもが適切な自己評価を行えるように、子どもが自己評価する視点を評価計画としてもつ

ことで、より有効な自己評価活動が行えるようにした。

(2) 自己評価を授業改善に生かす

自己評価は、あくまでも子どもたちが自ら学習する力を育成するために行うものである。しかしそれは、教師にとって授業を見直す重要な資料にもなり得ると考えた。

子どもが主体者になって学習を展開していくと、必然的に課題や活動は多様化してくる。その多様化した課題や活動に対して、適切な支援をしていくことが教師の役割であり、子どもたちに言葉の力を付けることにつながると考えた。

そこで、課題づくりや学習活動の基になる子どもたちの関心や意欲、多様化していく子どもたちの活動状況を知る手がかりとして、自己評価を有効に活用した。そして、個に応じた適切な支援を行っていくことで、子どもたちの主体的な学習を支えるようにした。

検証授業においては、子どもの学習カードから、教師や友達の他者評価と自己評価が、「読み」への意欲の高まり具合や「読み」そのものの深まりにどのように影響を及ぼしたかを読み取るようにした。

また、読み取った内容をどのような支援につなげたのかを中心に授業評価するようにした。

3. 検証授業

検証授業 - 小学校4年生「ごんぎつね」の学習を通して -

単元目標 ごんと兵十のすれ違いや心の葛藤、悲劇的な結末などから、場面についての描写やごんや兵十の心情を、叙述をもとに想像しながら読む。

(1) 主体的な読み手を育てるための工夫

作品や作者との出会いを大事にし、子ども自身がゴールを見据えた学習計画を立てて、自らの課題にそって作品を読み進められるようにした。

そのために、初発の感想から生まれた課題について、表現されている言葉を大切にしながら読むようにした。何をどのようにして読むのかは、一人一人が考えるようにし、じっくりと物語と対話させたいと考えた。その後、友達との「読み」の交流、教師との「読み」を通しての対話などを行い、自らの読みを広げたり深めたりするようにした。

そして、共通の課題で「読み」を交流し、そこからさらに詳しく読み深め、再交流し発信していけるような学習活動にしてみた。

(2) 自己評価の位置付けと役割

教師は、1時間ごとの子どもの発見や悩み、「読み」の深まりなどを子どもの学習カード(含 自己評価)から受け止め、励まし、新たな読みの視点を与えるようにした。さらに、友達との相互評価や教師との対話(カード上の紙面对話)を通して、より深い「読み」の活動につなげていくようにした。

(3) 学習活動と子どもの自己評価(子どもが自己評価する視点に着目して)

	学習活動	自己評価の視点
1	○新美南吉について知る。 ○「ごんぎつね」を読み、大まかなあらすじをつかんで、初発の感想をもつ。 ○感想交流をして、「読み」の課題を作る。 ○学習の計画を立てる。	・読みの構えをもてたか。 ・ごん、兵十それぞれの気持ちを考えることができたか。 ・共通テーマになる学習課題を考えることができたか。 ・どのような学習にしたいかを考え、単元の見通しをもてたか。

2	<ul style="list-style-type: none"> ○読み深めたいところを詳しく読み、想像したこと、考えたことをまとめる。(自力読み) ・ごんや兵十の行動、表情、心の中のつづやきなどを手がかりとする。 ・友達と「読み」を交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初発の感想で考えたことを生かして、自分の読み深めたい場面を選んでいくか。 ・友達の読みに関心を持ち、自分の読みと比べられるか。
3	<ul style="list-style-type: none"> ○「読み」の交流をする。 「ごんの心が変わっていく様子を読もう。」 ○さらに詳しく読みたいところを自分で読み、友達と交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初発の感想を生かして、自分の読み深めたい場面を選んでいくか。 ・友達の読みに関心を持ち、自分のよみと比べているか。
4	<ul style="list-style-type: none"> ○共通のテーマのもとに「読み」を交流する。 ・自分の読みのまとめをし、自分の考えをもつ。 ・最後の場面での心の通い合いについて話し合う。 ・自分の考えをまとめ、初発の感想と比べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「心の通い合い」についての交流ができたか。 ・読みの深まりを得られたか。
5	<ul style="list-style-type: none"> ○読み取ったことをもとに、まとめをする。 ・音読、主人公への手紙、絵本作り など ○学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を選んで、主体的に取り組むことができたか。 ・振り返りを生かして学習を進められたか。

(4) 成果

主体的な「読み」の学習過程

長い物語を読むことに苦労している子もいたが、自分で選んだ場面をその時間じっくり読むことで、場面の様子やごんの気持ちが分かるようになった、という声が聞かれた。これは、自力読みの時間を保障したことの成果と言える。また、分からない言葉の意味を調べながら読んだり、時にはごんの気持ちになって立ち止まったり、時にはごんと兵十の心のすれ違いを見守ったりしながら、読み進めているのが学習カードから読み取れた。

また、単元の節目で「読み」の交流を設定したことで、友達の読みと自分の読みを比べ、新たな読みの視点を見出す子も多くいた。

「読み」を支えた自己評価

教師評価との関連

その時間の子どもの読みにコメントを入れる時には、新しい視点を与えるようにしたり、疑問を投げかけるようにしたりした。また、教師の読みを示し、再度自分の読みを考えるきっかけも作るようにした。

次時の学習の初めは、この教師評価を読むことから始まるため、子どもの読みは深まっていった。

友達との相互評価

友達の読みにふれて、自分の読みを知ることができた子が多くいた。また、友達からコメントをもらうことで、自分の読みを振り返り、考え直すきっかけになっていっただけでなく、読むことの楽しさを感じて、学習意欲を高めていくきっかけになった。

1時間ごとの振り返りとその一覧

子どもの学びの状況を知る手がかりとなり、個々への支援に有効にはたらいいた。また、短い時間で書けるようなスペースにし、それを単元全体で1枚に収まるようにした。その結果、何を自己評価したらよいかを子ども自身が気づいていくようになった。さらに、自分の読みの足跡を意識しながら、

次の読みを主体的に行えるようになっていった。

検証授業 - 中学校1年生「竹取物語」の学習を通して -

単元目標 かぐや姫の話とその元になった竹取物語に触れることで、おとぎ話と原典との相違点に気づき、古典の世界に興味をもち、その世界を楽しむ。

(1) 主体的な読み手を育てるための工夫

古典と本格的に向き合うことが初めての生徒たちにとって、この「出会い」は大きな意味をもつ。この「出会い」を大切に、生徒たちが古典学習を楽しめるものとしてとらえられるように心がけたい。

現在、おとぎ話としての「かぐや姫」は多くの人々によって語り継がれているが、もとになった「竹取物語」とは、文章全体のイメージが異なる。それは文章の省略や新たな追加によって、登場人物が脚色されたり省略されたりしているからであろう。生徒たちがもっている「かぐや姫」の知識と古典としての「竹取物語」の内容との違いから、「新たな発見」や「気づき」をもつことで主体的な読みが行えるようにしていきたいと考えた。

(2) 自己評価の位置付けと役割

「新たな発見」や「気づき」をもつことにより主体的な読みを行うための手段として、有効的な自己評価の設定をすることをねらった。

「かぐや姫の秘密」と題した学習内容を通し、生徒たちは授業ごとの「発見」や「気づき」を自覚することで意欲をもち、新たな発見や気づきを求めるだろう。つまり、「知らない自分」から「学習して知り得た自分」を自覚していく作業を自己評価という形で表現させたいと考えたのである。

そのために自己評価は形式的な判断によるものよりも自由記述式にし、生徒の「発見」「気づき」をそのまま表現させようと考えた。その自己評価の文章を教師は受け止め、支援することによって、さらなる「主体的な読み」へ発展させられると考えた。

(3) 学習活動と子どもの自己評価（自己評価と支援の実際に着目して）

< 学習の流れ、留意点等 >

「かぐや姫」を読んだ経験から、知っている話の内容を交流する。

* これから始まる古典学習との魅力的な出会いにつながるように心がける。

教科書の教材文を読む
・ 解説文
・ 冒頭の「古文」
・ 「くらもちの皇子」

* 「竹取物語」との出会い
* 歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの違いに気づかせる。
* 発展学習に意欲がもてるようにする。
* 学習資料の活用

かぐや姫の世界をさぐる

発展学習 1

「かぐや姫」に登場した人物がより身近に感じられるような発見、気づきをしてほしい。

仏の御石の鉢（石作りの皇子）
火鼠の皮衣（右大臣あべのみうし）
竜の首の玉（大納言大伴のみゆき）
燕の子安貝（いそのかみのまるたり）

選択して読む。

発展学習 2

- さらに、別の人物を選んで読む。
- 特徴的な場面を選んで読む。
「帝の話」 「別れの場面」 「富士山の由来」

* 学習ワークの用意

* 辞書を活用しての自力読み

- まとめと発展
- 感想交流
- 別の古典作品を読む。

< 自己評価と支援の実際 >

教科書で学習して

【自己評価の視点】

- ・「竹取物語」が「かぐや姫」の話の元になっていることを理解し、新たな発見をもつことができたか。
- ・古文と現代文との違いに気付き、疑問や発見、気付きが見つけれられたか。

【自己評価の抜粋】

教科書を読むと本当かな？と思うけれど、どんどん追求していくと架空の話なんだなあと分かった。物語がなぞに包まれていると思った。生まれて初めて「かぐや姫」じゃない「竹取物語」を読んだ。

古典の文を訳すのは大変だったけど、もっと早くできるようにがんばりたい。

【教師のコメント】

様々な発見のある教材です。とても深い「読み」ができていますね。発展学習ではさらに新たな発見がありますよ。

発展学習をして

【自己評価の視点】

- ・選択した課題を的確に行い、他者との意見交換によってさらに深めることができたか。
- ・興味をもった人物についての学習を行うことで、新たな発見をし、さらに興味を深められたか。

【自己評価の抜粋】

教科書や絵本にはない内容が原文にはのっていて、結構厚い本になるのではないかと思った。不思議なことがたくさんある。どうせならばこの頃にタイムスリップしたい。

竹取物語の次の授業でもっと追求したい。

【教師のコメント】

とても深く読めましたね。この時代についても調べ、さらに原文にもチャレンジしてみては？

(4) 成果

主体的な「読み」の学習過程

初めての古典学習。ここでは、古典の楽しさを十分に味わうことが大切であり、古語や歴史的仮名遣いへの抵抗を感じながらも、自分の力で「読み」を展開できるようにさせたい。教材に対する興味を引き出し、「読み」から生まれた発見や気付きを教師が大事にしていこうとしたことによって、教材に対しさらに関心をもち、次の自分の「読み」の目標をもつという主体的な読みの姿勢につながった。

「読み」を支えた自己評価

生徒一人一人が行った自己評価とその自己評価に対するコメント（教師評価）の繰り返しは、自分の学習に対する手応えと、作品に対するより大きな興味へとつながっていった。今後の古典学習に興味をもつて取り組んでいくことに有効に働いたのではないかという手応えを感じている。

研究のまとめ

1. 研究を通して見えてきたこと

昨年度の研究のまとめに、「自己評価を学習に位置付けることで、必然的に自分の読みの在り方を意識するようになった。つまり、自由読書ではない「読み」の学習の成立に自己評価は役立ったと言える。」と記した。今年度の研究を通して、改めて自己評価の有効性を実感することができた。

それは、子どもにとって 次時への学習意欲をもちやすい。「分かった。」「読めた。」という思いを実感できる。「もっと、〇〇したい。」というような、新しい課題発見につながる。

また、教師にとって 学びの状況をとらえやすい。個の学習状況に応じて支援ができる。学習に節目をつけやすく、やりっぱなしにならない。などである。

そしてそれらは、小学生、中学生という発達段階に差はあったとしても、共通して求められることのように考えている。

自己評価の有効性を考えたとき、「読み」を支えるという視点ではなく、今後は、自己評価を軸に据えて「読み」の授業を行う、という視点で授業作りを行うことが重要なように感じられる。

2. 今後の課題として

自己評価を行う際に、デメリットとなる部分も明らかになっていった。それは、自己評価にかかる時間と教師側の活用の問題である。

学習指導にかけられる時間が削減された今、自己評価にあまり時間をかけられない。また、自己評価を子どもの負担にしたくない、ということは避けて通れない。また、せっかく行った自己評価を教師が活用しきれないのは、宝の持ち腐れである。

自己評価の形式を工夫し、子どもも教師も無理なく継続できる方法については、今後も研究していく必要がある。また、そのような無理のない自己評価の継続こそが、自己評価力の育成への近道であると考えられる。

最後に、研究を進めるに当たり適切なお助言をいただきました先生方、ご支援いただきました当該校の校長先生、教職員の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

【参考文献】

- | | |
|---------------------------|-------------|
| 『小学校学習指導要領解説 - 国語科 - 』文部省 | 1999年 |
| 『中学校学習指導要領解説 - 国語科 - 』文部省 | 1999年 |
| 安彦忠彦著『自己評価』 | 図書文化社 1999年 |
| 田近洵一他編著『読者論に立つ読みの指導』 | 東洋館出版 1995年 |

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------------|-------|
| 川崎市立小学校国語教育研究会長（川崎市立大師小学校長） | 北村 清 |
| 川崎市立中学校教育研究会国語科部会長（川崎市立玉川中学校長） | 中村 正弘 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事 | 佐藤 彰美 |